

第2章 言葉

好きな言葉

好きな言葉は沢山ある。

「蓮托生」は好きな言葉

「蓮托生」とは、行動や運命をとみにすることです。NHK大河ドラマ『平清盛』で清盛(演:松山ケンイチ)が言った。「これから平家は一蓮托生だ」「オーッ」。私は「一蓮托生」という言葉に感動した。私は毎週欠かさずドラマを観ている熱心な『平清盛』ファンです。「これから池田家は一蓮托生だ」。

「いづすね」は好きな言葉

みんなで楽しく童謡や唱歌を歌うのが、最も好きな事です。いい気分になると「いいですね」

と言う。みんなの歌をほめる言葉です。ほめ言葉は、自分も歌いながら二拍または三拍伸ばして
いる時に言うので、長くてはいけない。「いいですね」が、ちょうどいい。

「山あり谷あり」は好きな言葉

講演会などで、「人生は山あり谷ありです」と言うのを聞くと苦勞をした人という感じを受ける。
童謡の会も「山あり谷あり」だ。学校と違い童謡の会は、気が向かなくなれば来なくなる。一番
親しくしている会員が、「この童謡の会は出入りが激しいわねえ」と厳しく批判する。大勢が
歌いに来る好い時もあれば、立ち行かなくなってしまう時もある。その時は、なりふりかまわず
必死で頑張る。山が来た時は好い気分が歌うが、歌いながらも次に来るであろう谷を心配する。
この繰り返しを毎回、そして、もう二十五年もしている。童謡を歌う事が、何よりも好きでなけ
ればできない。

「拍手喝采」は好きな言葉

「今日も大勢歌いに来ていただき、ありがとうございます。みんなで拍手です」「いい気分が歌
えました。ピアノの先生に拍手です。うまく弾いていただき、ありがとうございます。先生に、
もう一度拍手です」「こうして、みんなで元気に歌えて、今日は本当によい日でした。拍手、拍手」。
私の童謡の会では、何かにつけて拍手をする。時間内に、何回拍手するかわからないほどです。
「拍手喝采」は好きな言葉です。理由があります。

私は音楽大学を卒業すると、国立音楽大学の夏季合唱講座と、玉川学園の夏季音楽研修講座に参加して勉強を継続していた。自称、努力家そして勉強家。

玉川学園の講座には、全国から熱心な教師が参加していた。ある講師が、歌の指導の仕方を、歌を歌わせながら語った。その中で、「いやあ、うまく歌えました。なかなか良かったですねえ。今の歌に拍手です。ご自分にも拍手です」と言われた。私は、この聞きなれない「ご自分にも拍手」という言葉に感動した。そして、「自分をほめて拍手するのは最高」と思った。それ以来、拍手をするのが好きになった。拍手は、する方も嬉しいし、される方も笑顔です。

「山よし海よし天気よし」は好きな言葉

「山よし海よし天気よし」は、明治時代に斎藤緑雨が小田原を言い当てた言葉です。小田原は、山あり川あり平野あり海あり、気候温暖、四季の変化に富み、海の幸にも山の幸にも恵まれている。この言葉を最初に聞いたのは、元・小田原市長の挨拶だった。大勢の人を前に、胸を張って小田原をほめた。私は感動した。

次に、この言葉を聞いたのは箱根駅伝の放送です。アナウンサーが「いよいよ選手は小田原にさしかかりました。明治時代に斎藤緑雨という人が『山よし海よし天気よし』と言ったように、今日は駅伝日和の小田原です。空は青く、海も穏やかでキラキラと輝いています。選手の走りはどうでしょうか」と言った。私は笑った。「おお、この若いアナウンサーは、勉強しているぞ」と。そしてアナウンサーの名調子に感動した。

私も、おだわらシルバー大学の授業で、「山よし海よし天気よし」を紹介した。この言葉は、小田原にびつたりのとつておきの言葉です。

「捲土重来」は好きな言葉

三省堂国語辞典には「けんどじゅうらい」と書いてある。この四字熟語は「けんどちようらい」とも読む。「一度・やぶれた者（失敗した者）が、再び全力をあげて・くること（やり直すこと）。再び勢いを盛り返して、巻き返すこと。元は、戦いに敗れた軍が土煙を上げて再び攻め込むということ」。しかし、それはテレビドラマの事で、普通は一度失敗した者は、ふたたび全力でやりなおしても、世の中は簡単には認めないものです。壊れた壺は壊れたままだ。

「まざりたい」は好きな言葉

朝七時のテレビニュースで長野県大町市を紹介していた。北アルプスからの清流、湖のボートで遊ぶ人々。男のアナウンサーが「まざりたいですね」と言った。ずっと昔から聴き覚えのある好きな言葉だ。猛暑の夏、私も「まざりたい」と思った。

「あなたの喜びは、私の喜び」は好きな言葉

「今日は、蜘蛛の論文が一つ書けた」「それは好かったですね。あなたの喜びは私の喜びです」と喜んだ。しかし、他人はどうだろう。

童謡の会創立二十五周年の祝いの例会をした。すると、「お祝い申し上げます。私にとつても、新たな喜びの例会でした」と、共に二十五周年を喜ぶ会員がいた。家庭が円満で、おらかな主婦の一面がうかがえる。

酒屋の社長に、「新刊です。また読んでください」と言つてエッセイ集『歌つて暮らせば』の本を手渡した。「おめでとうございます。次々と、すごいですね。これ、ピンクの表紙で、いいですね」と、出版を自分の事のように喜んでくれた。育つた家庭環境が好く、素直な青年だ。

「あなたの喜びは、私の喜び」から、相手の過去が見えてくる。他人の事でも、わが事のように嬉しいと、喜ぶことが出来る人は健全です。最近は妬ましく思う人の方が多いようです。この短い人生、喜びを共有し、楽しく生きて行きたいものです。

嫌いな言葉

嫌いな言葉は沢山ある。

「つながり」は嫌いな言葉

若いアナウンサーが「富士山つながりで、ここの地酒は、おいしい」と言った。また、スポーツでは「今日の野球は山本つながりでお送ります」と言った。「この『○○つながり』という言い方は、どうもなじめない。嫌な言葉だわ」と夫に言うと、「若い人の言葉を批判するように

なりましたか。いよいよ年寄りになってきましたね」と笑った。

「お得」は嫌いな言葉

「お得」という言葉を頻繁に使う人がいる。「お得」という言葉には、「貧しい」イメージがある。「店頭のお得な品」「何かを拾って得をした」「何かをもらって得をした」「たらふく食べて得をした」などと使う。

私も主婦なので物が安く買えたりすると嬉しい。しかし、「お得」と人前では言わない。近所の薬局で「今だけお得十パーセント増量十二ロール百九十八円」と書いてあるトイレットペーパーを一個買った。

予約した年賀葉書の配達に來た郵便局員が、「粗品です」とポケットティッシュを一個差し出した。それには、「便利でおトクな、ゆうちょの貯金」と書いてあった。「これが粗品なの」と夫が言った。その年は、年賀葉書を千枚買った。

「切れる」は嫌いな言葉

新選組一番隊組長の沖田総司は七百年生き続けた名刀「菊一文字則宗」を所有した剣豪だった。その沖田でさえ労咳で死ぬのが怖かった。新選組副長・土方歳三にも「死ぬのが怖い」と打ち明けている。明治初期まで肺結核は労咳と呼ばれ、治す薬は無かった。新選組は沖田の死を悼んだ。新選組にとって、なくてはならない人だったからだ。辞世の句「動かねば 闇にへだつや 花と

水」を残した沖田には女性のファンが多い。

農家の男、善助も労咳だった。やはり「死ぬのが怖い。死ぬとはどのような事だろうか」と漏らしていた。そして善助も死んだ。妻・加代の悲しみは深かった。親戚が集まって小さな葬儀をした。集落のしきたりで、通夜が三日間にも及んだので中には時間を持って余した人もあった。レンタルビデオ屋でビデオを借りて来て観始めると、何人かが集まって来た。みんなで観ていると、そこに加代がやって来て、「今日は何の日かわかっているのか。あなたたちは何をしているのか」と怒鳴った。するとビデオを観て笑っていた一人の若者が立ち上がり「お姉さんが切れた」と言い返した。その場にいた親戚の人々はドツと笑った。加代より年上の親戚の人もいたが、「切れた」と言った若者を諫める人はいなかった。逆に、「何もする事が無いんだからビデオを観るぐらい、いいじゃないですか、キミ、君は心が狭いよ」と、ビデオを観ている人々をかばう発言をする男もいた。加代の悲しみは、いっそう深くなった。葬儀の後、加代は親戚から孤立した。「切れる」は最も嫌いな言葉となった。

「聞き捨てならない」は嫌いな言葉

近所の人みんなで世間話をして笑っていると、突然、男の人が「それは聞き捨てなりませんね」と言い出した。そして、長々と説明をした。みんなが帰ってしまった、女の人と私だけになると、女の人は悔しそうに、「あのような時に、とっさに、あのような言葉が出て来ないわ。ずっと後になって、やっと思いつく言葉よ。その場で、ああ言えば好かったと、一週間も十日も経って思

うのよね」と言った。

「聞き捨てならない」とは、聞いてそのままにしておけないということだ。まじめ、頑固な人が使う。笑つてごまかして世の中を流れて行く人は使わない。使わない人は、「聞き捨てならない」と言われると驚き慌てる。私などはゾツとする。

昔、父も「家に帰って寝る頃になつて、ああ言いたかつた、こう言えば好かつたと思う。どうして、あんなふうに、すぐにしゃべれるのかな」と悔しがっていた。それは経験がモノを言うのです。「組長しつかりしろ」と野次を飛ばされた父は、養子だったので集落の過去を知らなかつた。「よそ者」が組をまとめようとしても難しかつた。小学校の教員だつた父は、「それは聞き捨てなりません」と言い返したかつたに違いない。

「頭が下がる」は嫌いな言葉

「頭が下がる」と言う言葉は、「自主的な清掃に頭が下がる」のように使われる。その人をほめる言葉だが、なんとなく上から目線で偉そうに聞こえる。時として「頭が下がる」と言つておきながら腹の中では舌を出して笑つている場合にも使われる。教師と生徒の親の關係で使われるのを目の当たりにすると、なさけないと思う。だから人間關係は難しく面白いのかもしれないが。

「先生の指導には頭が下がります」「研究には頭が下がります」「努力には頭が下がります」。私は、この「頭が下がります」という言葉は信用していかない。あちらでも、こちらでも軽々しく使われたくない言葉です。昔から「実るほどこうべを垂れる稲穂かな」と言う言葉がある。自分は

常に学び続け、謙虚な気持ちを忘れず生きたいと思っています。

「全身全霊」は嫌いな言葉

相撲取りが「次の場所も全身全霊で取り組みます」と言うのを聞くと、「真面目な人だ、頑張り」と応援したくなる。しかし、国会議員が「全身全霊」と言うと、期待が持てないのはなぜだろう。「全身全霊で教育改革に取り組む」「全身全霊で防衛力を強化し、強い日本にする」「全身全霊で党を立て直す」「全身全霊で美しい日本を作って行こうではありませんか」。どの議員も口にする。テレビニュースで聞いたたびに、「全身全霊」と言う言葉が重みをなくし嫌いになっていく。

「節子」は嫌いな言葉

テレビで節約について放送していた。最近では節約に励む若い主婦を「節子」と呼ぶらしい。夜はロウソクの火で過ごす。ロマンチックな夜を楽しむ。冷蔵庫は置かない。生ものはその都度買って来る。マーケットやコンビニは、近くにいくらでもある。極めつけは、暖房器具を置かない。窓の隙間にテープを貼るのはもちろんだが、近所の友人を招いて人の体温で部屋を温かくする。これには驚いて言葉がない。節約の達人「節子」。節子という名前の人は、この流行語をどう思っているだろうか。

難しい言葉

「長生きをしてください」という言葉ほど難しい言葉はない。高齢者介護施設にボランティアに行つて「これからも、歌を歌つて長生きをしてください。また来ますから、それまで元気でいてください。またお会いしましょうね」と言うと、みんな手をふつて大喜びだ。

『NHKのど自慢』の司会者の小田切千さんが、九十四歳の母親の介護をしているという歌い終えた男性に「どうぞ、お母さまともども長生きをなさってください」と声をかける。出演者は嬉しそうだ。さわやかな司会だ。ゲスト歌手の氷川きよしさんも八十九歳という女性に「歌も踊りも好かったですよ。長生きをしてください」と言った。氷川きよしさんは好青年だ。

「絶対に助けるからね。長生きをするんだよ。そうでないと一人っ子の私が一人ぼっちになつてしまうよ」。二度目の輸血を受けている父に、胃ろうを作つた母に、私は必死で声をかけた。この時すでに二人共、九十五歳になっていた。

二人の娘が「お母さん、お父さん、長生きをしてね」と言う。ありがたい事です。しかし、私たちは、まだそのような年齢ではない。まだ若いと思つている。

クリスマスの日、夫に愛を込めて言った。「同じ年齢だから、どちらが長生きをするか競争しよう」。すると「あなたに決まっています。僕は肝炎をしたから、近い内に肝臓癌で死んでしまいます。長生きをしてください」と、夫が真面目に言った。それは遺言のように聞こえた。

さて、「長生きをしてください」と、言葉をかけようとしても、かけられない人がいる。この言葉は、相手と好い関係にないと、なかなか素直に出ない。嘘では言えない言葉です。かけても

らえない人は、これまでの自分の生き方に問題がありそうだ。

あいさつ

あいさつには、嬉しい、悲しい、悔しい、温かい、凍るような、いろいろなあいさつがある。あいさつの力には驚く。

あいさつ「ご苦労様」

電柱工事で一車線通行になっていた。交通整理をしている人が、「こちらをお通りください」と言った。「ご苦労様です」と言って通った。交通整理をしている人が、お辞儀をした。私は一日中清々しい気分だった。

あいさつ「申し訳ない」

午前中、童謡の会があったので留守をした。夕方、再配達宅配便が来た。「午前中、留守をしまして、申し訳なかったです」と謝ってから御中元を受け取った。連日猛暑。

あいさつ「お世話さま」

郵便局で、夫から頼まれた所に送金をした。なれない事なので、郵便局の職員に面倒をかけて

しまった。「お世話さまでした」と心を込めて頭を下げてお礼を言った。

あいさつ「おめでとう」

昔の大人は子どもや若い人に好い言葉をかけた。「賢い子だね」「かわいらしいね」「きれいな着物だね」と。しかし、私はなかなか他人に声がかけられないでいる。ランドセルを背負った小学生に「おかえりなさい」とか、部活の朝練に行く中学生に「頑張るね」とか何か言っただけでいいのでいいでいる。

三月末、幼稚園の卒園式の帰りの家族に出会った。父親は黒の背広、母親は黒のワンピースに真珠のネックレスをしている。子どもは小さな花束を持っている。勇気を振り絞って「おめでとうございます」と声をかけてみた。すると母親が「ありがとうございます」と言った。嬉しそうだ。しあわせな家族です。

私は大人になった気分になった。修行をし、悟りを開いて、百歳までには、もっと立派な大人になるので期待をしていたきたい。

あいさつ「こんにちは」

私の町は「あいさつ運動」を推進している。私は、トボトボと道を歩いて来る高齢者に出会うと「こんにちは」と、あいさつするように心がけている。嬉しそうに、「こんにちは」と、あいさつを返す人もあるが、ほとんどの場合、返事がない。突然なので声が出ないのだろう。一人住

まいだと誰とも話さないから、すぐに言葉が出ないのだろう。私は、あきらめないで続けている。私が逆の立場、一人ぼっちで生きていて、自分より若い人から声をかけてもらったら、きっと嬉しいに違いない。しかし、ゾツとする、あいさつもある。

ある日、庭の草むしりをしていた。道行く男性が「こんちは」と軽いあいさつをした。後ろから声をかけられたので振り返った。私は固まり、声が出なかった。背中に寒い物を感じゾツとした。それは、わが家の玄関で巨体を丸め手をついた「土下座女」の夫だった。夫は奥さんの借金を知らなかった。当然、「土下座」の事も知らない。この事件は、女から借金を頼まれた母が、お金を貸した事に始まる。私が気が付いた時には、貸したお金は、おいそれとは返せない金額にふくれあがっていた。母は人助けのつもりだったが、女から脅されていた。女が「土下座」をして、借金は「なかったこと」になってしまった。日本には昔から困った時には、なりふりかまわず「土下座」をするという風習がまかり通っている。

私の脳裏から、この光景が消えることはない。私が一人にいる時、下を向いて悲しそうな顔をしているのは、このためです。

あいさつ「ありがとう」

ある日、宅配便の青年が「先日はチョコレートを、ありがとうございました」と言った。「宅配便の青年がチョコレートのお礼を言ったわ」と、夫に荷物を渡しながら言った。「そうですか」「嬉しいね。『ありがとう』の言葉を聞くとは思っていなかったわ。よかった」「そうだね」「私

たちが一袋食べて、宅配便の青年夫婦が一袋食べたのよ」「宅配便の青年は独身で、一人で一袋食べたかもしれないよ」「それはないわ。奥さんと一緒に食べたに決まっているわ」「なぜ、わかるの」「結婚指輪をしていたわ」「よく見ているね」。

ある日、童謡の会で飴を持って来た会員がいたので全員に配った。公民館のボイラーを管理している用務員さんにも渡した。一ヶ月後の童謡の会の日、私の顔を見た用務員さんが「このあいだ、飴を、ありがとう。声が良くなったような気がする」と言った。帰宅して夫に話した。「いただき物をして、次に会った時、『ありがとう』と言うのは今どき珍しいわ。普通は、お礼の言葉は言わないものです」。すると夫は「何粒あげたの」と、つまらない事を訊き返した。

ある日、紙ごみを車に乗せて月に二回、大井町山田にある美化センターに持って行く。個人の直接搬入は有料。一回二百円から三百円かかる。それを近所の土下座をした主婦が組長になった平成十七年四月から続けている（平成二十六年夏、わが家の隣りにゴミ集積所が設置されたので終了した）。

美化センターには、気さくな女性の受付の人がいる。「先日は、サクランボ、ブドウ、モモを、ありがとうございました。みんなで美味しくいただきました」とお礼を言った。お礼を言われた夫は、本当に嬉しそうだった。これらの果物は自宅の山形産。仕事をしている人たちに食べてもらおうと、夫が自分で収穫して車で運んで来たものです。

ある日、家の外壁の塗装工事してもらった。ペンキ屋が三人で朝の七時半から来て仕事をしました。一日中、塗っている。山形の柿を三人に渡した。「山形の家の柿です。食べてください」。す

ると翌日、「昨日は、柿をありがとう」と言つて、一人の職人が菓子折りを持つて来た。赤や緑のペンキにまみれた仕事着が、かつこよかった。外壁の塗装工事は十日も続いた。ペンキの臭いで頭がどうかなくなってしまいそうだ。

最後の日、リンゴを三人に渡した。「山形のリンゴです。食べてください」「今日で終わりです」「きれいにしてもらつて、ありがとうございます」。一週間後、女の人が玄関に来た。「ペンキ屋です。先日は柿とリンゴを沢山いただき、ありがとうございます。これは、北海道に行つて来たので、お土産です」「まあ、花畑牧場の生キャラメル。珍しい物を、ありがとうございます。北海道に行かれたのですか」「私の故郷は北海道の余市町なので、里帰りしたのです」「余市町は知っていますよ。宇宙飛行士の毛利衛さんの故郷で有名になりましたね」「よく御存じですね」。ペンキ屋さんの奥さんは、急に嬉しそうな顔をした。「私は一度だけ北海道大学を見学に行つたことがあります。車を買つたので、試運転という事で、そのまま乗せられて。青函連絡船で北海道に渡りました。大昔の話です。まさかの旅行になり、お金の持ち合わせがなかったから、一日しかいなくて帰つて来てしまいました。摩周湖、池田町、網走、利尻島にも行きたいと思つています」と話が弾んだ。

「お父さん、嬉しいねえ、ペンキ屋さんがお礼に来たよ」「よかったね」。まだまだ古き良き時代の温かい人間関係は残っている。「それは、珍しい事です」と夫が言った。今どきは、次に会つた時、お礼を言わなくなつたし、お返しをしなくなつた。

仰天のこと

人生は、仰天だらけです。

「白いロマンスカー」に仰天

酒匂川にかかる青い鉄橋の上を白いロマンスカーが走って来る。晴天、青い空、富士山には雪、今日はカメラのシャッターチャンス日和だ。白いロマンスカーは車体も広く大きい。新型のデザインは、みんなが選ぶ特別賞に輝いた。しかし、何だかしつくりしない。これに乗ると、病院へ連れて行かれそうだ。なかなかなじめない。なぜだろう。

娘が言った。「外国の風景になら映えるよ」「なるほど」。思いがけない娘の意見に仰天した。この白いロマンスカーが、イギリスのウェールズの草原を駆け抜けたらどうだろう。私はロマンスカーが大好き。

「さかなクン」に仰天

さかなクンに、「学校での勉強の方は、どうでしたか？」と、アナウンサーが訊いた。すると、さかなクンが「学校のお勉強はできなくて、先生にご迷惑をおかけしました。すみませんでした」「お母さんは、どのように？」「お母さんはですね、僕を自由に泳がせてくれました」と、ギョッとする発言をした。自由に泳いだ結果、さかなクンは日本中のアイドルになった。礼儀も正しい。

好い家庭環境に育つたに違いない。好青年だ。

さかなクンは、魚の食べ方を教えてくれる。この日は魚の骨の唐揚げ。アナウンサーが「美味しい」と言つて食べた。それを見た、さかなクンは大喜びだった。「ありがとうギョーございます」。

最後に「魚を見て、なんでだろうと考えてほしい」と、まとめた。東京海洋大学客員准教授の顔を見せた。さかなクンは、本当に魚が大好き。

「兎」に仰天

三十年前のある日、兎を売り歩く男が家に来た。母が「どの色がいいかしら、白は汚れが目立つわ。ネズミ色がいいかしらね」と言った。白い兎は赤い目が、かわいかった。私は白い兎が欲しかったがネズミ色に決まった。ネズミ色を二羽買った。兎は、後ろ足で立って私を驚かせ、喜ばせた。私が「上手、上手」と手をたたくと、何度も後ろ足で立って見せてくれた。私の声に反応して耳がピクピク動いた。兎は沢山遊んでくれた。

しばらくすると、父も母も兎を飼うのにあきた。いつものことだ。正月が過ぎた頃、父と母の腰にネズミ色の兎がいた。「これ、とても温かいわ」と、きどった感じで母が言ったのを覚えている。兎は、なめされて腰巻になっていた。

「イルカショー」に仰天

平成二十七年（二〇一五年）四月、私の誕生日に娘が『新江ノ島水族館』（藤沢市）に招待し

てくれた。行ってみると水族館入口の「バースデーボード」に名前が書いてあった。あいうえお順で、派手な「池田小百合」という名前が一番に書いてあり輝いていた。私は仰天した。続いて十人ほどの名前があった。

さらに仰天する事がおきた。イルカ・アシカショー開催前に名前が紹介された。「池田小百合さん、お誕生日、おめでとうございます」私は立ち上がって両手をふってから、お辞儀をした。「どうも、ありがとうございます」会場みんなが私に向かって拍手をした。なんて、すばらしい誕生日。イルカも大きくジャンプした。水しぶきをあげて巨体が空を舞った。

誕生日得点で、私を囲んで家族全員で写真を撮ってもらった。クラゲ、ペンギン、ウミガメ、今話題の深海研究の有人潜水調査船「しんかい2000」の展示もあった。

「ホタテの目って知っている？ 外套膜、紐の部分のブツブツした黒い点が目、目は八十個ぐらいで、レンズを持っていて。食べるとボリボリして歯ごたえがある。酒飲みの好物だね」と私が言うと、娘が「知っているよ。小さい頃、お父さんとホタテの解剖したでしょう」と言った。私は娘の記憶力に仰天した。解剖の事を覚えていなかった私は落ち込んだ。

昼は娘が予約しておいてくれた「カプリチョーザ江ノ島店」で食事をした。最後にバースデーケーキが運ばれて来て、来店者全員で『ハッピーバースデー』の歌の大合唱になった。「おめでとうございます」と拍手をいただいた。仰天の連続だ。私たち夫婦は二人とも四月生まれ、同年齢。夫が感動して言った。「全然知らない人も、歌ったり拍手をしたりしていたね。みんな陽気で、すごかったね。娘たちも良く育って好かった。親の事を、こんなに思っていてくれる子どもは、

他にいないよ」と。

娘も言った。「私は新江ノ島水族館の年間会員になっている。イルカショーでのネームコールは四月半ばで終わり。だからお母さんを誕生日に招待したかった」と。楽しい嬉しい一日でした。忘れられない一日になりました。

「新江ノ島水族館」は、昭和三十四年（一九五九年）、旧「江の島水族館」時代に国内で初めてバンドウイルカの繁殖に成功した。現在、飼育しているバンドウイルカは計十頭。三頭は静岡と長崎から野生で搬入され、七頭は館内で繁殖した。

「成人」に仰天

成人式の日、「ダンダンダンダン」という聞きなれない音に振り返った。小田原駅のエスカレーターの右側を振り袖姿の女の子が奇声を上げながら駆け上がって来た。だれかを追いかけて、呼び止めようとしているようだった。私は仰天した。しかし、周りにいた人は平然としていた。だれも「やめなさい。振袖の前がはだけてみともないよ」と注意をする人はいなかった。もう大人の仲間入りだからね。

「ダイバー」に仰天

日本列島は各地で大雪だ。この真冬、スキューバダイバーの仕事が紹介された。水に潜って船の外壁のひび割れを修理する。一時間潜って仕事をしては温水をかけてもらい、ストーブに手を

かざして温まって、また仕事をする。その繰り返した。「ウエットスーツを着ていても水風呂のようです」「体が冷えて来ると頭が働かなくなります」と、その青年が言った。体が壊れてしまします。潜水の仕事で聴力を失った人に出会ったことがある。若い時にしかできない仕事です。

平成二十七年（二〇一五年）四月十五日、観光客が多く訪れるゴールデンウィークを前に、小田原城址公園のお堀の底にたまったゴミを、ダイバーが堀の水の中に入って清掃作業をしているのに遭遇した。お堀の底からは自転車、鉄パイプ、携帯電話などの他、北條五大祭りのイベント用幟旗のぼりばたが引き上げられていた。お堀に自転車を投げ込むとは非常識です。幟旗は十本もあった。「雨が降って水が濁っている今日やらなくても。それに水、冷たいでしょう、体を壊してしまいますよ」「桜が散った頃に、という事で、今日になりました。それぞれ仕事を持っているから決めた日にやらないと都合があるので。ダイバーが潜水して行う清掃は今回が初めてです。一月には芦ノ湖の湖底の清掃もしました。今日の水温は十四度、視界が悪く、手探り状態です。水が冷たいのには慣れていません」。

ボラントニアのダイバーは十三人。真鶴町のダイビングインストラクターの人もいた。「ごくろうさまです」。

「その男」に仰天

私の自転車を追い抜いた男の自転車は、進んで来たパトロールカーと正面衝突しそうになり、危うく左にカーブして難を逃れた。男は「バカヤロツ」と怒鳴った。私は「危ない」と叫んだ。

降りて来て注意するかと思つたパトロールカーに乗っていた警察官は無言で行つてしまった。

人は、男女生まれ来る人数は、ほぼ同じなのだそうです。しかし、成人するまでに交通事故や病気で亡くなる男は多く、この時点で女の数が男の数を上回る。高齢になると寿命もあり、圧倒的に女の数が多いのだそうです。この事は、自転車男の激しい行動からもわかります。男は無鉄砲。パトロールカーにぶつかつて死んでいたかもしれません。危機一髪でした。

つづいて、私の目の前で、男は仰天の行動に出た。川音川の橋の手前の通称「ピョンピョン橋」まで来ると、乗っていた自転車車を肩にかついだ。そして、ピョンピョンと石を涉つていなくなつた。私も、一度この「ピョンピョン橋」を涉つた事がある。流れが急な所では足がすくんだ。私は、男の人は無鉄砲だと、あきれた。

「女の店員」に仰天

マーケットのレジが混雑している。夫がささやいた。「食品を一つ一つビニールに入れるのを断るのです。そうすれば、その手間だけレジを打つのが早くなる」「そうだね」。

私が店員に「ビニールに入れないでいいです」と言うと、店員は不機嫌そうに「汁がこぼれてしまうかもしれませんよ」と言い返した。私は仰天した。

買った物を買ひ物袋に詰める台には、自由に使えるビニール袋がロールにして置いてある。汁がこぼれそうだと思つた客は、自分で入れればいい。帰宅してみると、汁がこぼれた買ひ物袋から魚の臭いがした。すぐに洗濯をした。

「春一番」に仰天

春一番が吹いた。松田山を見ると帯状の緑・黄色をした物が上昇気流のように立ち上がっていた。「何だろう?」と見てみると、次の瞬間、強風は帯状の物を吹き飛ばした。スギ花粉だと気がつくまで時間がかかった。帯状の物は、風が吹くたびに立ち上がっては次の瞬間、強風によって吹き飛ばされた。松田山の桜は、もうすぐ咲く時期をむかえている。大勢の観光客が来る。

箱根の外輪山を見て、さらに仰天した。強風が吹くたびに白い煙がたなびく。『箱根八里』（作詞・鳥居枕 作曲・瀧廉太郎）の歌にも「杉の並木」がある。こちらもスギ花粉だ。観光客の人が「桜は咲いていないわ。あれは、火事かと思った」と言った。野焼きの煙のようにも見える。

私は人生で初めてスギ花粉が帯状に立ち上がるのを見た。「今日は」と、夫に話すと「勤務先の山北町で毎年見て知っています」と言った。さらに、金融に勤める娘に話すと「箱根支店に配属になった人は、必ず全員が花粉症になる」と言った。「そうですか」。

その後、天気予報の花粉情報は、関東全域に「非常に多い」の赤で塗った表示を毎日出した。私はクシヤミが出続けて、鼻水に悩まされた。眼が開いていられないほどシクシク痛く真っ赤になった。頭がボンヤリして寝込んだ。スギ花粉にやられた。それから一週間後、暖かい日が続き、ようやく河津桜が満開になった。観光客がドッと押し寄せた。

「電気を消すな」に仰天

玄関に土地建物関係の販売員が来た。「まにあっております。けっこうです」と、用意をして

おいた言葉を使った。「そうですか」と青年は言い、それで終わった。玄関の電気を消した。すると、帰りかけていた青年が振り返って「まだいるのに、電気を消すのは、客に対して失礼じゃあないですか」と言った。私はゾツとした。「あつ、すみません。ごめんなさい。そうですね、失礼しました」と言つて慌てて電気を点けた。青年は、そのまま行つてしまった。

「幼児番組」に仰天

テレビの幼児番組を観ていた。この日は、保育園・幼稚園の園長や主任の先生が集まってビデオを見ながら対談をしていた。テーマは喧嘩の仲裁について。ほとんどの場合、子ども同士で解決させていた。先生方は、「見守ればいいのですよ」と気楽に言っていた。しばらくすると、二人の女の子がオモチャの取り合いになった。片方の女の子が椅子を持ち上げて「ぶっころすぞ」と叫んだ。テレビを観ていた私は仰天した。先生方は「いけませんね」と言つて笑っている。これが、今の保育園や幼稚園の現状なのだろうか。

幼い子どもが汚い言葉を使うのは、家庭で親が使っているからに他ならない。先生方は笑つて聞き流してはいけません。保護者会などで注意すべきでしょう。先生が若い親を教育できないのは、自分も平気で使っているからです。テレビのタレントが「でけー」「やべー」「すげー」などと言うのを聞いて、なれてしまつていますからです。次元の低い言葉は、がさつな子どもを作ります。子どもには、おだやかな言葉で接したいものです。

時々思い出す番組がある。日本テレビの幼児向け番組「ロンパー・ルーム」だ。二代目お姉さ

んとして、うつみ宮土理（愛称・ケロンパ）さんが先生役で、お行儀を教えていた。三人の子どもたちのテーブルに紙コップが並べられ、ケロンパが牛乳をそそいだ。子どもたちは、膝に手を置いて、静かに待っている。ケロンパが「いただきます」。続いて子どもたちも「いただきます」と言う。元気に子どもたちが飲んだ。そして一人の子が言った「もう、ない」と。牛乳は一センチほどしかなかったから、すぐ飲み終えた。その子は、おかわりをしたかったに違いなかった。しかし、ケロンパは、その子の発言を無視した。賢い宮土理さんだが、台本にセリフが無かったため、言葉が出なかったようだ。眉間にしわを寄せて、うるさそうな顔をした。立派な言葉を期待した私はがっかりした。それで、ずっと覚えている。

番組は大人気だったが、ケロンパが話しすぎ、自己主張が強くて見苦しかった。後日、お兄さんに「歌の時に歌わないでください」と非難が殺到した。お兄さんは音痴だった。お兄さんはニコニコ笑っているだけになってしまった。

「脳ドック」に仰天

タレントの石田純一さんが「僕は一年に一回は人間ドックに行っています」と言った。また、俳優の大和田獏さんが「家族で脳ドックを受けるべきでしょうね」と言った。さっそく秦野赤十字病院の脳ドックを予約した。

MRI検査の前に注射をされ、「気分が悪くなったら、このボタンを押してください。咳はしないように。唾も飲み込まないように。動かないでじっとしててください。少しでも動くと正

確な結果が出ません」など、いろいろ注意された。

MRIの中は不気味なほど静まり返っていた。時折、コンコンという音が聞こえて来た。すぐに咳をしたくなり、唾を飲み込みそうになった。検査用の衣類の紐が腰のあたりで結び目がおかしいのではないかと思いはじめたら、じっとしていられなくなった。検査の人が機械の操作を間違えて、このまま一人で死んでしまったらどうしよう。検査で死にたくない。緊張が走り、始まつてすぐ受診した事を後悔した。しかし、高い検査費用の事を考えて我慢した。

長い時間が経過して検査は終了した。私は起き上がれなくて検査員に抱きかかえられるようにして立ち上がった。「大丈夫ですか」「ええ、なんとか」。何が何だかわからないまま、フラフラしながら帰宅した。帰宅して寝込んだ。

しばらくして検査結果が出たという連絡があったので病院に行った。脳神経外科の部長のような立派な体格の人と面接があった。開口一番、「なぜ、脳ドックを受診しようと思われたのですか」と訊かれた。私は言葉に詰まった。「タレントの石田純一さんと、大和田獏さんが」とは、とても言えない。「子どもの頃から片頭痛があり、五十五歳になったので、一度検査をしてみようかと思ひまして」と言った。先生は、「そうですか異常はありません」と、検査結果のプリントを私に渡した。検査結果は全部の項目に鮮やかに「A」が付いていた。私は、もう脳ドックはこりごりです。

「金沢」仰天の旅

娘たちが小学生の頃、日本蜘蛛学会の大会が金沢であった。金沢は観光地、夏休みだったので家族全員で行く事にした。暑いので、夫が「ジムニー。愛称は侍（さむらい）」で夜間走行して、朝、金沢の研修施設に到着した。

「池田家ご一同様」と看板に書いてある部屋が用意してあった。娘たちは大喜びして、早速お風呂に行きたがった。大きな浴場には背の高い美しい若い女性が一人で入っていた。私たちが「ワイーッ」と叫びながら入って行くと、逃げるように風呂からあがった。だれもいなくなった大浴場で、私たち親子は大騒ぎをして楽しく過ごした。いい気分だった。

風呂からあがって、受付の所を通ると、私は仰天した。さつき裸で風呂に入っていた美しい女性が、今度は白いブラウスに紺の公務員風の制服を着て受付をしていた。次々と到着する利用客のチェックインを、にこやかにしていた。「服を着ている」。私は頭が真っ白になった。

その時から、私は大浴場がきれいになった。さつき一緒に風呂に入っていた人たちと、同じテーブルを囲んで平気で食事をするなんてできない。

金沢といえば、「兼六園」だが、勉強不足だった。後日、テレビで「兼六園」が放送されるたびに、もっと勉強してから行けばよかったと思うが、後の祭りだ。

観光案内を見て、「忍者寺」に興味を持ったので行ってみる事にした。娘たちは、私が行きたいと思う所に、自分のように、ついて来た。一緒に遊んでくれた。

「妙立寺」は、「忍者寺」と呼ばれている。藩主・前田家ゆかりの寺。三代藩主前田利常公の命

により、城内にあった祈願所を移し、運上町に創建された。前田利常は当時すでに隠居し小松に居を構えていたが、四代藩主光高の後見人として依然としてその権力の座にあった。当時、加賀藩は百万石の禄高を誇る外様大名の雄として徳川幕府から常に監視下に置かれ相当の緊張状態にあった。実際、幕府内では加賀征伐の計画すら存在したという。こうした背景にあって、利常は金沢の街をはじめとして、幕府の軍勢を迎え撃つための態勢を整えて行った。

大勢の観光客は、一班、二班と、小さなグループに分けられた。気がつくとき、おや？ 娘たちがいない。迷子になったか？ 私は青くなつた。すると「お母さん」「このようなカタチになりました」と言つて二人が現われた。見ると黒いスカートを履いて嬉しそう。スカートはウエストにゴムが入つていて簡単な作りだった。「どうしたの？」と訊くと、係りの女性が「寺の中では、膝から下を露出するのは厳禁なので」と説明した。「そうでしたか」。二人は、赤いショートパンツを履いていたから、その上に黒のスカートを履かせてもらつていた。まるでハワイのフラダンスのようだ。私は笑うのを我慢した。二人は大喜びだった。

中に入ると「大広間」があつた。ここは祈禱所。時々お忍びで殿様もおいでになつたとか。殿様は、二階席から御覧になつたらしい。敵を鉄砲で迎え撃つための「鉄砲を差し込む穴」、「隠し階段」、「落とし階段」、「明り取り階段」、茶室には仕掛けがあり、綱を引くと掛け軸の後ろに次の間が現われた。庭には「井戸」があり、井戸から犀川の向こうの城に通じるトンネルが掘られていた。屋根には「物見台」がある。最後に「切腹の間」があつた。小さな部屋に入ると、内側からは開かないという説明だった。

犀川の下をトンネルが通っている？ 城に出入り口がある？ 殿様が、そこを通って、この寺に来る？ 敵も通って攻め込んだのか？ 私は、想像して夢心地になった。後日、何回も切腹の間に閉じ込められたり、階段から落ちたり、井戸のトンネルに生き埋めになった夢でうなされた。緊張感のままに「忍者寺」の見学会は終了した。外に出た観光客は、だれもがぐったりしていた。そして、「すごかったですね」「すばらしかったですね」と面識のない人同士、口々に言葉を交わした。私も庭のベンチに座って立ち上がることができないでいた。気がつくとき、おや？ 娘たちがまたいない。迷子になったか？ 私は再び青くなった。すると「お母さん」「先ほどのスカートを返して来ました」と言ってお娘たちが来た。「おもしろかった」「楽しかった」、「本当に夢のようだったね」。その後、他のお寺やデパートを見学したが、「忍者寺」以上の感動は、もうなかった。

奇妙な話

これは、世にも奇妙な話です。

「銀行」奇妙な話

銀行ができた。店長と女性社員が我が家に来て言った。「今度、駅の近くに〇〇銀行ができました。ご挨拶に回っています。最初の入金は一千万でかまいません。通帳を作っていただけではないでしょうか」と。二人はパンフレットを置いて帰った。この間、五分。それで、夫と私の通帳を作った。

十年後、別の店長と女性社員が我が家に来て言った。「〇〇銀行ができて十年になりました。ご挨拶に伺いました。これからも、どうぞよろしくお願いします」と。私は、いつも思っていることを言った。「お財布代わりに使わせていただいています。とても便利です。頑張ってください」と。二人はパンフレットを置いて帰った。この間、五分。

二十年後、別の店長と女性社員が我が家に来て言った。「〇〇銀行が出来て二十年になりました。ご挨拶に伺いました。これからも、どうぞよろしくお願いします」と。私は、いつも思っていることを言った。「この二十年間、〇〇銀行から一度も何ももらつたことがありません。普通の銀行や郵便局、保険会社では貯金するとティッシュとかカレンダーとかボールペンといった粗品、皿やコップ、バッグ、タオルを御礼としている所もあります。あなたの銀行からは、何一つもらつたことはありません。それがとても気に入っています。こちらこそ、これからもどうぞよろしく。頑張ってください」と。玄関は爆笑になった。

店長が言った。「このような、ほめられ方は初めてです。恐縮です。今後とも、どうかよろしくお願い申し上げます」と。二人はパンフレットを置いて帰った。この間、五分。私はこの銀行が気に入っている。

「郵便局」奇妙な話

冬の夜六時半、郵便局には窓口の男性職員と私だけがいた。シーンと静か。この郵便局が気に入って利用している。窓口の職員は単行本を読んでいた。そこに女性職員が来て言った。「お茶

にしましう。緑茶、紅茶、コーヒー、ココアどれにしますか」と。男性職員は「ココアをお願いします」と言った。私は、お笑いタレントのアンガールズの山根良顕さんのような男性職員が好きだったので、ココアと聞いて、ますます好きになった。

私は、郵便局の大きなテーブルに、童謡の会の写真を三十枚並べて選んでいた。決めた二枚を封筒に入れ窓口で出した。そして「郵便振込もお願いします」と頼んだ。すると彼は、「ATMでやってください」「やり方がわかりません。どうやるのですか」「入れればいいんです」と面倒くさそうに言った。窓口からATMの所に出て来る事は無かった。私は男性職員に教えてもらいたかったのです。

いったん郵便局の外に出たが、「入れればいいんです」と言う素っ気ない言葉を思い出し、もう一度戻ってATMを操作した。振込用紙を入れ、紙幣を入れた。ただ、入れれば送ることができた。以後、ATMは簡単に操作できるようになった。教えてもらわなかった事が幸いした。ありがたい事でした。

「遺影」 奇妙な話

葬儀で重要なものは遺影です。写真を用意して置く事にした。夫の所属する日本蜘蛛学会の大会が箱根で開催された時、撮った集合写真が気に入っていたので、写真屋に持って行って引き伸ばしてもらおう事にした。

写真を見た写真屋の主人が言った。「小さいですねえ、これを引き伸ばすと、ポケてしまいます。

僕が撮ってあげましょう」「明日死ぬわけではないのに、いいんですか」「そうですね、あなたはあと三十年は大丈夫そうですね。遺影は若い時の写真でもいいんですよ。毎年ウチに撮りに来る人もいます。昔は白黒でしたが、今は皆さんカラーです」「私は、自分で気にいるようないい写真がありません。撮っておこうと思つています。今日は髪の毛の両サイドがそろつていません。今度カットしてもらつて、髪形が気に入った時に来ます」「いつでもいいですよ。お待ちします」「よろしくお願いします」。

いま撮影した写真でも、百歳の葬儀に使えると聞いた私は、笑いが止まらなかつた。笑いなから童謡の会をした。安心したので気が楽になつた。

それからしばらくして、遺影の写真の相談をした写真屋が無くなつた。看板がはずされ、普通の家に改造された。別の人が住んでいた。写真屋の主人はどうしたのだろう。まさか、私より先に逝つてしまったのだろうか？

夫は「遺影の写真は、写真屋で撮ってもらふといいです。写真屋は修正をしてくれます」と言う。私は、なるべく早い内に遺影の写真を用意したいと思つている。

「花嫁人形」奇妙な話

私は、「大井町生きがいはほえみ大学」の講師をした。高齢者に人気の童謡『花嫁人形』を、みんなで歌う事にした。この童謡には中間部に一ヶ所八分休符がある。「(ン||八分休符) はなよめ」と歌う。ところが、全員が休まないで歌つた。「あれ?」、それで注意をして、伴奏の左手部

分を大きく弾いた。しかし、二度目も全員休みを入れずに歌った。しかも、リーダー格の人が、「私たちは、違つてないわよね」と言う、「そうよね」と皆さん。童謡の会を作ったばかりだった私は、あわてた。そのままにして、次の曲に進んだ。今、童謡の会で『花嫁人形』を歌うと、会員は休みを入れて正しく歌う。何も問題がなかった。「大井町生きがいほほえみ大学」では、どのように間違えていたのか。謎だった。

ある日、私は『花嫁人形』のピアノを弾きながら歌う練習をしていた。「休みを入れないで歌うと、どのようなになるのか」と、真剣に悩んでいた。そこへ四人の宗教伝道の人々が来た。

「ちょうどいい所に来られました。どうぞあがってください。私は今『花嫁人形』の練習をしています。この歌、知っていますよね。歌ってみてください」。すると、宗教の勧誘の人々は逃げるようにいなくなつた。

「帰ってください」「二度と来ないでください」と言われることはあつても、「あがつてください」とは、初めて耳にする仰天の言葉だったようだ。それとも、名曲『花嫁人形』の歌を知らなかったのだろうか。謎は深まるばかりだ。

「魔法の言葉」奇妙な話

私は、誰かに何か言われると、すぐめげてしまふ。がっかりして、うなだれて、エネルギーを失い寝込む。夫が「わかりやすい人ですね。いじめがいがあります。相手の思う壺です」と笑う。事案によつては十年、二十年、六十年と立ち直れないものもあるが、童謡の会に關しては、すぐ

に立ち直る。〈魔法の言葉〉を持つているから。

ある日、「今日の童謡の会は、いかがでしたか？」と夫に訊かれ、「全然うまくいかなかった。私が話した事が、ある人の一言で全て壊されてしまったわ。ガツカリだわ」と言った。すると夫が「その人は年を取っていないかい」と〈魔法の言葉〉を言った。「なるほど」。真つ暗だった心がパツと明るくなった。気分が晴々とした。

それ以来、童謡の会で何か言われても、〈魔法の言葉〉が立ち直らせてくれている。

「小さな恋」奇妙な話

娘チツチ（仮名）が小学生の時、子供会で運動会があった。抽選で一等のピクニックセットが当たった。二等当選の男の子が、それを見に来た。そして小さい声で、「ピクニックセットの方がよかったな。僕はチツチが好き」と言った。それを聞いた男の子の母親が「おまえには、チツチはもつたいない」と言つて彼の頭をバシツと殴つた。その小さな恋は、それで終わった。

同じ頃、別の母親が我が家を訪ねて来た。「今度、引越すことになりました。チツチには、大変お世話になりましたので、一言ご挨拶に伺いました」と。娘が学校から帰宅したので、「村上サトシ君（仮名）に、何かお世話をしたの」と訊いた。すると娘が、「サトシ？ クラスにいたっけ？」と言つた。その男の子の母親が心配した小さな恋は、最初からなかった。

娘が高校生になったある日、メロンを持った母親が車から降りて来て言つた。「息子が、チツチに教えていただいた『青春18切符』で北海道に行つて来ました。とても好い旅だったと言つて

いました。お土産にメロンを買って来ましたので、みなさんで召し上がってください」と。息子は車の中で下を向いていた。出て来て挨拶をする事は無かった。帰宅した娘が言った。「高校生にもなって、一人で旅行した事もないなんて」と。メロンは夕飯に「美味しい、美味しい」と言って家族みんなで食べた。ママが息子に頼まれてプレゼントを渡しただけで、その小さな恋も実らなかった。

「白内障」奇妙な話

母（君代）は、娘たちが大学生の時、白内障の手術をした。手術は女の先生で、手術の前に入念な検査と、ミーティングがあった。手術はほんの七分程度で終わり、そのビデオをもらって、すぐ帰宅した。母は、私には「手術は、痛かったよ」と言ったのに、他人から「手術をされたそうですね。いかがですか？」と聞かれるたびに、「なんでもない。よく見えますよ」と言って笑っていた。きれいな四季おりおりの景色が見えることは、すばらしいことです。

わが家は白内障の家系のようです。私が大学生の時、祖母（たつ）も白内障の手術をした。昔の事なので、一週間も入院し、目を包帯で覆い絶対安静でした。包帯を取ると、「光がまぶしい」と言った。そして、「よく見えるの？」と聞くと、「手術をしても、たいしてかわらない」と、みんなをガツカリさせた。祖母は退院しても、かつてのように雑巾を縫うことはなくなり、この頃を境に、急に痴呆になっていった。農家から嫁に来た人なので、足腰は、最後の頃まで達者でしたが、孫の私に、「親切な、お小僧さん、どうもありがとうございます」などと言ひ、しだいに

誰が誰かの区別がつかなくなった。いくら痴呆が進んでも、夜中に徘徊したり排泄物を食べたりということはありませんでした。母が食事の面倒や、排泄物の世話をし、父が車を運転して医者連れて行ったり、風呂に抱きかかえて入れたり、布団を干したり掃除や洗濯をして、まめまめしく世話をした。

この経過からすると、確実に私（小百合）も孫が大学生の時、白内障の手術をしなければならなくなるでしょう。そのことはいつも頭をよぎり、眠れないことがあります。不安です。娘たちに話すと「その頃には、もっと医学が進歩している」「八十過ぎまで生きていられるかの方が問題だよ」と言います。夫も、「先のことを、くよくよ考えても、なにもならない。だいいち白内障になるとはかぎらないのだから。なったらなつたで、その時は、その時さ。その頃には、僕は肝臓癌で死んでいないし、せいぜい、娘や孫との関係を良くしておくことだね」と笑った。のん気な家族です。

「老衰」奇妙な話

医者が未熟だと盲腸と癌を間違つて診断することがある。これを一般に「やぶ医者」と言う。痛がるのは盲腸のあたりでも、もっと深い部位に癌がある場合がある。たとえば胆管癌。これはわかりにくい。高齢者の場合、盲腸の手術を受けた事があることを、家族が認識していないと大変なことになる。

高齢者の死因で最も多いのは「老衰」。よく「大往生だった」などと聞く。「老衰」といっても、

死には必ず原因（病名）があるはずだが、昔は高齢者の死因は「老衰」と、ひとくくりにされてしまい、詳しく記録されている事はあまりない。

近年、たとえ癌とわかつていても、高齢の場合は延命治療をしない選択がふえているようだ。食事の量が減り、食べられなくなると死が近い。呑み込みが悪くなる前から、すでに体は栄養を受け付けていないようだ。点滴はせず、胃ろうは作らない。呼吸が荒くなっても酸素ボンベは使わない。自然にまかせ自然に逝くのを見守る。穏やかな死には痛みがない。痛みを感じる脳細胞が減少しているから。たとえ癌であってもその死は「老衰」と認められる。脳などの研究が進み、死について、ここまでわかつて来た。だれもが求めている亡くなり方は、安らかに眠るように逝く「老衰」なのではないだろうか。

「小さな旅」奇妙な話

平成二十七年（二〇一五年）六月二十五日（木曜日）晴天、小さな旅に出た。目的は三つ。一つ目は、昨年十一月一日にデビューした箱根登山鉄道のアレグラ号に乗る。二つ目は、アレグラ号モデルのパッケージのロング・バウムクーヘンを買う。三つ目は、大きな噴水の強羅公園を見る。これは、昨年の十一月一日の神奈川新聞を見て計画していた。寒いので、一日延ばしになっていた。

小田急線小田原駅から箱根湯本駅まで赤い箱根登山電車に乗った。この赤い電車は、最初は新松田駅から箱根湯本駅までの各駅停車だったので、珍しくなかった。車内は混雑していて座る所

がないので、先頭の車両の運転手の後ろに立っていると、カーブのたびに左側の斜面に脱輪、脱線、転覆しそうだ。危険な電車だ。単線なので、反対車線の駅構内でロマンスカーが通過する。無事、箱根湯本駅に到着。所要時間十五分。

箱根湯本駅に到着するロマンスカーを、ピンクの制服の清掃員の人たちが大勢で待ちかまえていた。今乗って来た電車の写真を撮ろうとすると、一人の清掃員が「すみません」と謝った。清掃員は、ずいぶん沢山いる。

箱根湯本駅で乗り換え。いよいよ昨年十一月から楽しみにしていた新型車アレグラ号に乗車。大涌谷が噴火警戒レベル2なのに観光客は多い。満員。一両目の中央の通路側の席に座った。車窓の風景が見えない。中国人の観光客が奇声をあげている。楽しそうだ。車内のアナウンスが時々聞き取れないほどの騒ぎだ。日本人の若者四人グループが「スイッチバックって何だっけ?」「小学校で習ったよね」「昔だよね」「そうそう」と笑い転じた。

三回のスイッチバックで急斜面を登って行く。そのたびに、運転手さんと車掌さんが入れ替わる。小さい運転手さんと大きい車掌さんが入れ替わるたびに、「今度は太った人」「また太った人」と言っている人までいた。「アジサイが咲いてないわね。もっと多いかと思った」と言う声もあった。言いたい事を言って、みんな楽しそうだ。

カーブの要所、要所にアマチュアカメラマンが、五、六人ずつカメラを構えていた。男の人数が多かった。保線夫さんのグループも三、四ヶ所に見受けられた。整備・点検の日なのでしょう、人数が多い。ご苦労様です。

平凡な赤い車体と思っていたアレグラ号は、強羅駅の終点で全員が降りると、新型車の座席、窓、出入口、一両目と二両目の間など、全てがピカピカで、すばらしかった。写真を撮った。何枚も撮って満足した。運転手さんも撮った。「こちらに、一枚お願います。ありがとうございます。ごさいました。(アレグラ号)素敵ですよ」。興奮した。箱根湯本駅から強羅駅まで所要時間は十一分。

箱根強羅公園(国の登録記念物)に行った。急な長い坂道に、坂の途中でもどる人が大勢いた。ハイヒールを履いた人、大きな旅行カバンを持った人は登りきれない。私は、何があるのかなと期待をして登った。

公園の入場料金は五百五十円。アジサイは咲いていなかった。熱帯植物館は温室で、ブーゲンビリアやハイビスカスが少し咲いていた。ヤシ、タコノキ、ソテツ、シユロ、パイヤ、バナナの木など。しかし、特別珍しい物はなかった。私は愛知県の「椰子の実博物館」で熱帯の植物を見たばかりだったから。一組の夫婦が、「温室なんか、暑くてたまらん、出口はどっちですか」と聞いて来た。私もその場から退散した。汗だくになった。

この公園の売り物は何といっても大きな噴水。入場券にも写真がある。行ってみることにした。なんと噴水はやっていなかった。まわりのベンチで大勢の人たちがソフトクリームを食べていた。じりじりと暑い。噴水に水がないのは、大涌谷の噴火警戒レベル2と関係があるのかもしれない。すぐにあきらめて土産物売り場でロング・バウムクーヘンを買って帰宅した。

翌日、納得がいかないので強羅公園に電話をした。「昨日、公園に行ったのですが、噴水はやっていないし、アジサイは終わり、温室は暑いばかりで、何も見る物がありませんでした。噴水は、

なぜやっていなかったのですか？ わかっていたら入場券を買いませんでした」。すると、電話に出た男性が説明をした。

「月に一回、第三か第四の木曜日に噴水の清掃をしています。昨日は清掃の日で、噴水はお休みでした。すみません」「もつと朝早くからやったらどうですか？」「朝六時からやっています。水を抜いて、清掃して、八分目まで水がたまるまで一日かかります。水が少ないとモーターが空回りしてしまいます」客に知らせないのはいけません。知っていれば入場券は買いませんでした」「窓口に掲示してあります」その掲示は、わかりませんでした。切符売り場の人が口頭で伝えるか、見える所に大きく『噴水清掃中』の看板を出した方がいいです」「参考意見とさせていただきます」。今まで噴水があがっていなくても、文句を言う人がいなかったのだろうか。観光客は平気だったのだろうか。噴水の清掃を知っていたのだろうか。私には、残念な旅行でした。

翌日、山形から帰宅した夫とロング・バウムクーヘンで。普通の味だったが、ロング・バウムクーヘンが小さな旅の救いでした。

平成二十七年（二〇一五年）六月三十日、地震が相次ぎ、大涌谷の一キロ圏内は噴火警戒レベル3になった。

「大男」奇妙な話

公民館で童謡の会があった。いつものように裏口からマイク、コード、テーブルコーダー、譜面台、楽譜、歌の本、コピーした資料などを運び込んだ。受付でカギを受け取ると、節電で薄暗

い正面玄関から入って来た男と出会った。男は日に焼けた大男だった。ダンボールを重そうに抱えていた。男と目が合ったが挨拶をしなかった。町では「あいさつ運動」を呼びかけているが、気軽に挨拶をしようと思うような男ではなかった。すれ違った男の事は、エレベーターに乗るとすぐ忘れた。

童謡の会が終了して帰宅すると、いつものように「今日の童謡の会はいかがでしたか？」と夫が訊いた。「公民館の正面玄関で、ダンボールを抱えた大男に会ったわ。挨拶もしないで、嫌な感じが残っているわ。私は外では、だれにでも挨拶するけれど、すれ違う時、目が合ったのに挨拶もしなかったわ。挨拶ぐらい減るものではないから、すればいいのにね」。

すると夫が言った。「ダンボールではありません。あれは蜘蛛グッツが入った衣装ケースです。あなたが童謡の会をしている時、蜘蛛グッツの展示をしました。貝類が展示してあったスペースは、今、蜘蛛になっていきます。僕が並べたのです。帰りに見なかったのですか」「エッ、そうなの」。公民館で出会った大男は夫だった。今、一緒に昼食をとったばかりなのに、「こんにちは」と挨拶をするわけがなかった。私は夫を忘れて、いい気分で童謡の会をした。これほど奇妙な話はない。

またある日、洗濯物を干していると、坂道をリュックを背負った男が歩いて来た。帽子を被り、黒い顔をした大男だ。私の方をジロジロ見ながら下って来る。私は洗濯機の後ろに隠れて男が行き過ぎるのを待った。なんと、男は我が家に入ってきた。男は「なにをしているのですか」と声をかけて来た。それは夫だった。「ビックリした。悪い人かと思った」「僕に気がつかなかったの？」。

夫が山形に帰郷していたことを、すっかり忘れていた。

言葉の力

人には好い言葉をかけたいものです。たった一言、なにげない一言が、人を元気にしたり駄目にしたりする。

言葉の力「きれい」

夕方、道を通ると庭木の片づけをしている奥さんと目があった。知らない人だが「こんにちは」と挨拶した。そして、「この木、きれいにできましたね、自分でやられたのですか？」と言葉をかけた。旦那さんが「そうです」と嬉しそうに答えた。

私が通り過ぎると、「よかったねえ、ほめてくれる人がいて」「みる、だんだん腕があがつてるんだ」と言う夫婦の会話が聞こえた。仲の好い夫婦です。旦那さんは、この木の剪定に朝から取りかかっていて、一日がかりでした。門の横にある松は、植木職人の仕事のように美しく仕上がっていました。

言葉の力「若い」

役場の生活環境課の青年職員が来た。「下水道事業受益者負担金賦課決定通知書」と「納付書」

を持って来た。農地だった所を去年宅地にして駐車場として携帯電話の取扱店に貸した。「駐車場なのに下水道の税金を支払うのに疑問があります」と言うと、説明をしてくれた。あまりうまい説明ではなかったが、だいたいそうだろうと思っていた答えだったので、「わかりました」と言った。そして、「若くて、なかなかいいねえ、頑張ってください」とエールを送った。すると、役場の職員は「いやー、どうも」と言って笑った。緊張が、いっぺんに解けたようだった。私も笑った。役場の職員は、手に他の家にも配る書類を十通ぐらい持っていた。役場から一番遠い我が家が一番に来たのでしょうか。

帰ってしまったから、やりとりを思い返して、小学校の教員だった母の言い方にそっくりだったなあ、と思った。私は、だんだん母に似て来た。今度は一人で苦笑した。

夜、落ち着いてから書類を見た。説明では、「一括で収めてください」との事だった。「三年分一括」、その額を見て顔が引きつった。

言葉の力「元氣」

午前中、雲っていたのでアジサイの苗を植えた。すでに庭を囲むように植えてある花桃「照子姫」（わが家ではそう呼んでいるが、本来は「照手姫」という品名）の間にアジサイを植えて行っただ。すると宅配便が来た。腰を曲げて作業をしていた畑から、ヨロヨロと出て行くと、「ここにサインをお願いします」と青年が言った。「元氣だねえ」と言いながら、差し出されたボールペンでサインをした。荷物を受け取った私が「ご苦勞様でした」と言うと、青年は「ありがとうございます」

ございました」と言つて走つて車に乗り込んだ。一瞬、さわやかな風が吹いた。私も元気になった。午後は、雨が降つた。

言葉の力「まずい」

子育てをしていた頃、いつも隣りの町のマーケットを利用していた。それで何も問題はなかった。ある日、惣菜コーナーの前で、「ここのお惣菜はまずい。食べられたものではない」と言っている人がいた。それを聞いたとたん、買ったコロッケや、ちらしずしがまずくなつた。私は買わなくなつた。

マーケットの社長が、買い物客が乗つて来た自転車の整頓を一生懸命していたが、客はその人が社長と気がつかないで挨拶もしなかつた。しばらくすると、その店は閉店した。「あそのマーケットのお惣菜はまずかつた」という印象だけが、いつまでも残っている。一度付いたクレームは払拭できないものです。

言葉の力「その一言」ヒトコト

中学生の時、友だちが無線の資格を取るために勉強をしていた。見せてもらった参考書は、とても難しかった。「すごいなあ」と彼女を尊敬した。

その頃、私は天気図を作る事に情熱を注いでいた。ラジオから聴こえる南の島々の名前、何ミリパールという言葉に酔いしれて、夢中で書き取り、天気図を作つた。台風が来ると等圧線が複

雑になり美しかった。

今日、「南大東島付近には台風二十一号があり」「与那国島南南東」「西表島」「北北東の尖閣諸島方面」「魚釣島」「沖ノ神島」と、次々懐かしい島々の名前がテレビから聴こえて来た。中国艦七隻が接続水域（先島諸島）を通過したニュースだった。「昔、天気図を作る事を趣味にしてやっていたことがあったわ。楽しかったのよ」と、高校の理科の教師だった夫に言うと、「そんなに、すごい事をしていたのですか」と驚いて、ほめてくれた。

しかし、これには突然の結末があった。中学校の理科の時間、先生が簡単に言った。「次は、天気図ですが、テレビの朝夕の天気予報で天気図は観ているとわかると思うので、時間が無いから天気図の所は抜かします」。私は、がっかりした。私は天気図を得意としていたので、みんなの前で発表したり、先生からほめられたりしていたら、きっと全然違った人生が開けていたかもしれない。その日かぎりで天気図を作るのをやめた。大好きだった理科は最も嫌いな科目になった。しだいに理科関係の本を見なくなった。

一人の先生が大勢の生徒に向かって言う言葉は、その中の一人の生徒にとって特別な一言になったりするものです。人生を変える重要な言葉になります。この理科の先生は、クラス担任だったが、私が天気図を作る事に没頭していたことも、自分のクラスに無線の試験の勉強をしている生徒がいる事も知る由もなかった。全国に知れ渡る「全人教育」をモットーとする学園で、「全人」という名のもとに生徒の生活態度や性格に点数をつけている先生の中には、普通以下の人もいた。

言葉の力「ウン」

童謡の会で「ウチの息子が」と話し始めると途端に「ウン」と声がかかった。長女の夫の話をしようと思ったのだが、あとが続かなくなった。

私は娘の夫を自分の息子のように思っている。藤沢市湘南台に家を買ったので私たち夫婦を招待してくれた。晴天の「平成二十四年五月五日・子供の日」に。みんなで「たこ焼きパーティー」をした。その後、四人で近所の大きな公園を散歩した。娘が「藤沢市の公園には、必ず藤の木が植えてある」と教えてくれた。「いい公園でしょう」と娘の夫が言った。それは、まるで自分の庭のような言い方だった。こんなにうれしい事を、私が童謡の会で話さないわけがない。話したいに決まっている。

長女の夫は、素直で明るく優しい。自分の仕事に情熱を持って取り組んでいる。何よりも娘を愛している。それが嬉しい。私が娘の夫の事を他人に話す時、一体何と言えばよいのだろう。

言葉の力「小さい」

私は、とても小さい。小学生のように小さい。自分でも足が短い事を自覚している。

ある日、夫が「近所の店で長靴が売っています。草むしり用の長靴を買いたいと言っていたでしょう。二十三センチが売っていました。買って来てあげましょうか」と言った。「それでは大きすぎる。二十一センチがほしいのよ。長靴だったら二十センチでも履けるわ」と返事をすると、「小さいんですね」と笑った。私も笑った。夫が長靴を買って来てくれようとしていた事が嬉し

かった。

ある日、背が高く、がっしりした肉付きのよい体格の兄弟に囲まれて言われた。「ちいせーッ、なんてちいせーんだ。人間とは思えない」「こいつ生きているのかア、こんなに小さな生き物が世の中にいるのか、信じられない。よく生きているな」と。今まで生きて来た内で一番の屈辱を受けた。私は黙って下を向き我慢した。歯を食いしばり拳を握りしめた。お通夜の真っ最中だったから。この状況が、早く通り過ぎる事を願った。一人の兄弟は私を見て、「あれ、こいつ泣いているみたいだぞ」「どうしたんだろうな」とセセラ笑った。その兄弟とは、縁を切った。二度と再び会う事はない。兄は中学三年生、弟は小学校六年生だった。

私は、何度も復唱して悔しくて泣く。忘れる事ができないでいる。体格が「小さい」事は変えようがない。「小さいと言われたくなくれば、でかくなれ」「小さいと言われても事実だから我慢しろ」「本当の事を言って何が悪い」。人は何とでも言う。昔は陰口だったが、今では、本人を目の前にして平気で言う。言われた方は、気が弱いと自殺にまで追い込まれる。簡単に死んでしまう。小さい事は人知れず涙ぐましい努力をしても改善されない。親は心配して私に毎日牛乳を飲ませようとしたが、牛乳を飲むとお腹がゴロゴロ、シクシク痛んだ。隠れて牛乳を台所の流しに捨て続けた。親に「飲んだ」と、ウソをつき続けた。祖母が見ていて「もつたいない」と言った。私は頻繁に道を尋ねられる。迷っている人は、小さくて話しかけやすい私に心を許して尋ねる。今日も、松田郵便局の松田惣領支店の前で「郵便局は、どこですか」と訊かれた。「ここです」と言ってから、面識のないその人と、顔を見合わせて笑った。松田惣領支店は、道の向こう、駐車場の

奥にある。こちら側の道には看板が出ていないので、地元の人にしかわからない。小さくて話しかけやすい私、人の役に立った。

ある日の深夜、テレビを観ているとジャズ・ミュージシャンの菊地成孔きくちなるよしと、ハリウッド映画デビューを果たした注目の日本人トップモデルのT・A・Oと対談をしていた。菊地は背が非常に低い。その彼が言った。「チビなんて言われると、殺してやるぞと思う」と。

T・A・Oが、「鏡を見ると、顔のここがこうだったらいのにとか思います」と言うと、菊地が、「今でもそうなんですか。ステージで、きれいなゲストと共演すると、決まって背の高いのが不満とか、美しい顔と言われるのがイヤとか、みんな勝手な事を言いますね。プレッシャーって人それぞれで、思い込んだらテコでも動きませんよね」と言った。

菊地成孔は、「小さい」ことをバネに、この世界を駆け上がった。今や、東大や芸大の講師からラジオDJ、文筆業までこなす。「日本人こそジャズに向いている。ジャズは勉強すれば、できるようになる」と断言する。銚子市立銚子高校を経て、アメリカのジャズ専門学校『メーザー・ハウス』のサックス科（四年）を卒業した努力の人です。

ある日、夫が「キューイフルーツの棚の鉄パイプに当たった。もう少し下だったら眼に突き刺さっていた」と言って顔を手で覆って畑から戻って来た。夫は背が高い。一メートル七十五センチある。「危ないなあ」と思ったので行ってみたが、棚の鉄パイプは、遥か高い所にあった。私は一メートル四十五センチ。後日、古くなった温室と一緒に撤去した。

ある日、友だちになつた私より小さい人が言った。「食堂でパートの仕事をしているの、食べ

に来て」と。それで夫と一緒に行った。彼女は食堂の呼び込みをしていた。私たちに話しかけて来た。夫が、膝を曲げ、かがみ込んで「水族館を見てから食堂に行きます」と言った。水族館の小さな水槽には、小さな鮫が一匹泳いでいた。私たちが食堂に入ると「二名様、入りまーすッ」と大きな声で対応してくれた。私は、夫が私より小さい人と話をした事に感動した。涙が出るほど嬉しい事でした。

後日、食堂の話になった時、夫は「そうでしたか。何を話したか覚えていません」「そんな事もありましたか」と言った。私は、ますます夫を尊敬し、すばらしい人だと思った。さまざまな言葉は、人の心を揺り動かします。好い言葉をかけ合いたいものです。

言葉の力「意力」

娘が金融に就職した。私は、「銀行はお金を入れると出すだけだから、仕事を覚えてしまえば難しい事はない」と何気なく言った。シンプルな祝いの言葉だ。その一言は娘の立ち向かう力となっているようだ。今日も頑張っている。

言葉の力「質問」と「答え」

平成二十七年（二〇一五年）のNHK大河ドラマは『花燃ゆ』です。名家の生まれで将来が決まっている高杉晋作は、生きているのが退屈でしかたがなかった。「つまらん、つまらん、退屈で退屈で死にとうなるんじゃない」と言って遊び暮らしていた。その高杉晋作に吉田松陰が質問をする。

吉田「君の志は何ですか？ 僕の志はこの国を良くする事です。志は誰も与えてくれない。自分で見つけ掲げるものです。君は何を志しますか？」

高杉「学問がしたい」

吉田「何のために？」

高杉「わからん、じゃが、おもしろそうな気がする」

吉田「そうですか、では、共に学びましょう」。

高杉晋作の辞世の句

「面白き 事も無き世を 面白く」

NHK大河ドラマ『花燃ゆ』を観て、胸を病んで亡くなった高杉晋作の辞世の句が理解できた。テレビから学ぶことは大きい。

やる気を引き出す質問は、答えるよりずっと難しい。コンピューターが進歩した現代、そのコンピューターは教師に代わることができるか。例えば、生徒の足りない部分を統計的に計算して、この問題を解かせると能力がアップするという事を指示するのはコンピューターの方が優れている。しかし、コンピューターにできない事がある。例えば「君の夢は何ですか？」と生徒と一緒に考える。この場合、教師の力量が問われる。

言葉の力「気のせい」

平成二十四年正月、童謡の会で挨拶をした。「年を取る毎に元気になります。時代が進み、徐々に古い考え方や、しきたりがなくなり、重き荷が一つずつ消えて行きます。清々しい気分です。手足を自由に伸ばせます。子育ても終わり、これから、ますます何かできるような気がします」と「気のせいよ」と大向こうから声がかかった。会場は爆笑となった。

「歌は力をくれます。前に進む力です。みんなで歌って前に進もう」。

インターネットを見てみると、脳科学の第一人者、茂木健一郎さんの『茂木健一郎 クオリア日記』（平成二十四年六月十七日）があつた。

「美しさとか、幸せというものは、ほんの小さなことの中に潜んでいるものだと思う。決して、青天井の人生や、波乱万丈の成り行きの中に美しさがあるのではない。美しさとは、むしろ、「自らの限定」を受け入れる勇氣の中にあるのかもしれない」。

茂木さんによると「好きな事を楽しむと若々しく生きられる」「弾んだ会話をすると、前頭前野が活性化される」とのことです。

「弾む会話をしよう。笑い声のある生活をしよう。歌を歌って暮らそう。歌は好きですか」。